

アジア研究所の思い出

アジア研究所特別研究員・元国際関係学部教授 野澤 勝 美

アジア研究所設立50周年にあたり最初に思い起こすことは、これまで研究所から多くの研究上の便宜をいただき、充実した研究生活を送ることができたことです。

亜細亜大学の教員に採用されたのは平成10年でした。以後23年に退職するまで13年間を国際関係学部在籍しました。農業開発論を担当で飯島正教授の後任ということでした。それ以前に勤務先から派遣されたフィリピン大学客員研究員としての経験があり、フィリピン経済の主要課題である地域開発に焦点を置き、その背景にあるフィリピン政治経済の現状分析に関心を持っていました。

一方、フィリピン大学に在籍した折に、同大学のアジアセンター所長でアジア研究の泰斗、ライ教授から「地域研究は研究会による共同研究が望ましい。また、研究会は専門分野を具備し、地域の現状分析を行う研究者による、少人数で、かつ持続的であること」との助言を受けました。今一つ参考となったのは、同じく滞在中のアムステルダム大学の研究プロジェクト関係者からフィリピン研究では地方の政治経済状況の把握が不可欠で、それには地元教会司祭、地方紙記者との面接による情報収集が有効と教えられたことです。

必要なことは、研究交流による斬新な研究手法の確立です。自身はその能力がないにもかかわらず、亜細亜大学アジア研究所には研究会があり、これに適合と気づきました。国際理解に貢献する優れた報道活動に与えられる「ボーン・上田国際記者賞」を受賞された国際関係学部の斎藤志郎教授が平成10年までアジア研究所長におられ、その勧めで研究活動に加えていただきました。平成12・13年度研究会「東南アジア諸国の地域開発（I）」を学内教員、外部研究員の構成をもって発足し、以後20・21年度研究会「同（V）」

までの10年間、退職時まで研究代表者として運営し、その成果はアジア研究所・アジア研究シリーズと同じタイトルで刊行されました。

また、研究の成果をアジア研究所セミナーである「アジア・ウォッチャー」において発表の機会をいただき、これにはフィリピン政治経済が直面する課題を、平成10年11月に「逆風下のフィリピン経済改革」、13年4月に「アロヨ新政権の課題」とポピュリズムのエストラダ政権の崩壊で混迷したフィリピン情勢を報告しました。

平成23年の退職後はアジア研究所の研究会委員・嘱託研究員（後に特別研究員）として研究会参加を認められ、野副伸一教授代表の平成22・23年度研究会「新段階を迎えた東アジアⅡ」、遊川和郎教授代表の24・25年度研究会「同Ⅲ」、石川幸一教授代表の23・24年度「東南アジアのグローバル化とリージョナル化Ⅲ」、25・26年度「同Ⅳ」、27・28年度「経済共同体創設後のASEANの課題」、29・30年度「創設50周年を迎えたASEANの課題と展望」に加わりました。

近年は、調査対象にフィリピンにおける熱帯農作物のうち、タバコ、アブラヤシ、バナナ、コーヒーなどの生産、農民組織などを扱いましたが、これには背景として地方事情を盛込みました。アジア研究所からの一部補助による現地調査に基づくものでした。調査結果は、アジア研究シリーズ論文の他にも、アジア研究所紀要に随時発表させていただきました。

以上のように、自身が充実した研究生生活を送ることができたのは、アジア研究所をめぐる周辺インフラが整備されていたからです。大学図書館には書籍はもとより新聞、雑誌などが完備しています。また、研究成果の公表に関しても亜細亜大学学術リポジトリ、アジア研究所ウェブサイトが開設されており、アジア研究シリーズ、紀要などの掲載号がPDFで閲覧可能となっています。

アジア研究所の設立50年の歩みのなかで、研究情報のインプット、掲載論文公表のアウトプットの活用と便宜をいただき、改めてアジア研究所の皆様へ感謝しております。